様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：２３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０１７７７

研究課題名（和文）子どもの性的成熟に対する母親の困難感尺度の開発

研究課題名（英文）Development of mother's difficulty scale for children's sexual maturation

研究代表者
河内　浩美（Kawauchi, Hiromi）

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：６０３８７３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：思春期における性成熟の構造概念は，属性として≪生物学的な成熟≫≪生殖可能な状態≫≪性に関する心理的な成熟≫，先行要件として≪性ホルモン分泌機能開始≫≪自然的発生に伴う身体の成長≫≪性意識の認知≫，帰結として≪成人としての肉体的成長の完了≫≪二次性徴の完了≫≪妊孕能力の確立≫が抽出された．また，父親も含めた親を対象とした子どもの性的成熟に対する困難感尺度開発にむけた尺度項目として有用となる，子どもの思春期における性成熟に対して親がとらえる困難さは，6つのサブカテゴリーからなる≪子どもへのかかわりについての難しさ≫と2つのサブカテゴリーからなる≪親自身に起因する難しさ≫であることが明らかとなった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は，これまで国内に限らず諸外国において明らにされていなかった子どもの性成熟に対する親の困難さの実態が明らかにされた．これらを基に，父親も含めた親を対象とした子どもの性的成熟に対する困難感尺度の開発にむけ尺度項目の検討が可能となった．今後，さらに尺度が開発され一般化されることで，親のもつ子どもの性的成熟に対する困難感に向けた具体的な支援策の検討が可能となる．更に，親の子どもの性的成熟に対する困難感について，多方面からの要因との関連や影響要因が検討することが可能となり，取り残されている思春期の性に関する調査への活用が期待されると考える．

研究成果の概要（英文）：The structural concept of sexual maturation in adolescence was as follows. The following 3 attributes were extracted: `biological maturity", `reproductive state", `psychological maturity of sex". In addition, two antecedent requisites were extracted: `initiation of sex hormone secretion function", `growth of the body associated with natural development", `recognition of sex consciousness". Finally, 3 consequences were extracted: `completion of physical growth as an adult", `completion of secondary sex characteristics", `establishment of fertility ability". Moreover, it became clear that the difficulty that parents grasped for sexual maturity in the child's puberty was `the difficulty of the relation to the child" consisting of six subcategories and `the difficulty caused by the parent itself" consisting of two subcategories. These are useful as a scale item for the development of a difficulty scale for sexual maturation of children for parents.

研究分野：助産学・母性看護学

キーワード：性的成熟　思春期　困難　親支援　概念分析　尺度開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

思春期とは，子どもから大人へと性的特徴を伴う成長発達を遂げながら性の自己受容や自己実現を目指す時期であり，子育てにおいても，これまでとは異なる視点を持った関りが必要とされる．しかし，親自身が，性的に成熟していく子どもに対しどのように接したらよいのか，自信がなく不安や戸惑いをもちながら子どもと関わることで，親自身への過度な心的負担となり，こどもの性意識や性行動において影響を与えることが考えられる．これまで，思春期の性的成熟において母親自身に着目した研究は数が少なく，特に子どもの性的成熟に対する困難さに着目した研究は殆ど見当たらず，明らかとなっていない．そこで，子どもの性的成熟に対する母親の困難感を明らかにするために客観的に測定可能な尺度を開発することが望まれる．

思春期とは，性的特徴を伴う成長発達を遂げながら性的発達を遂げる時期である．現代の子どもたちは，SNS やメディアの普及により，地域を問わず誰とでも簡易に知り合える社会環境の中で，氾濫する性情報を取捨選択する十分な能力を養うことが難しい．そのため，無防備な性行動による若年妊娠や人工妊娠中絶，性感染症への罹患や，時には，性の自己受容においても性同一性障害といったように，多様な性に関する健康問題が発生し始める時期でもある．また，平成 24 年度の性犯罪の認知件数は，強姦 1,240 件，強制わいせつ 7,263 件と増加しており（犯罪白書，2013），その被害者の約 3 割を 10 代が占めるなど，性犯罪に巻き込まれるリスクを持ち合わせている．

現代の日本における子育ては，古来より母子関係が強いとされる文化背景があり，女性の社会進出が進み父親の育児参加が進められてはいるものの，子育ての主たる担い手は母親である．その母親は，身近なところでの子育て経験がないまま母親となり，母親自身が思春期を過ごした頃とは異なる社会環境，地域や社会での人との繋がりの希薄化が進むことで身近な相談者がいないことなどから，子育てへの不安や困難，孤独感に直面しやすい状況下に置かれている．また，思春期の子育て時期にある母親は，教育の延長に伴う親役割の延長化，夫婦役割や仕事復帰などにより複数の社会的役割を引き受けながら，母親自身のアイデンティティの変容課題に向けた対応が必要とされる．同時に更年期直前の時期との重なりから精神的不安定さを招く可能性も高く，うつ病や不安障害といった精神的負担が過剰となる可能性も秘めているのである．

このように，思春期の子ども達が性に関する健康問題や性犯罪に巻き込まれないためには，日常生活の中での親と子どもとの関りが重要である．しかし，母親たちは，このような状況に危機感を感じつつも，自身が過ごしてきた時代との違いに戸惑い，思春期の子育てモデルを見いだせないまま，子どもへの対応に困難感を感じているのである．

母親の子育てに関する研究は，子どもが新生児や乳幼児である頃に関するものが多くを占め，思春期の子どもの性に関連する親の研究は少ない．先行研究においては，母親の性意識や性価値観，子どもとのコミュニケーションなどと，子どもの初交年齢，避妊や性感染症予防などといった性行動や性意識と関連があることが明らかにされている．つまり，母親の性の価値観や子どもへの対応，親子関係などが子どもの性的成熟の発達発育に何かしらの影響を与える可能性があることが推察される．また，親自身に着目した研究においては，子ども性的成熟において正確な知識を得る機会がなく，自身を持って子どもに性を語ることができないとする母親も少なくないことが明らかになっている（齋藤，2004）．河内ら（2008）の中学生の子どもと両親との会話に関する調査においても，子どもとの会話が少ない親の方が「性」についての悩みを持っていることが明らかとなった．更に思春期を迎えた子どもをもつ母親を対象に行った調査では「子どもの 2 次性徴を認知してから大人として認識するプロセス」が母親の思春期の子どもの変化における経験として見いだされ（河内ら，2013），子どもの性的成熟の成長発達において多様な対応を駆使して子どもと関わりをもち，子育てする中で様々な側面からの困難さをもつ母親たちの姿が浮き彫りとなった．

以上より，思春期における子どもの性的成熟の成長において，母親らが抱く様々な側面における困難感は，子どもの性意識や性行動への影響や，母親自身にも過剰な精神的負担を与える可能性が考えられる．よって，子どもの性的成熟に対する母親の困難感に向けた支援が必要であると考えた．

２．研究の目的

本研究は，現代の子育てにおいて子どもと多くのかかわりをもつ母親に焦点を当て，母親の子どもの性的成熟に対する困難感を測定する尺度を開発することである．

３．研究の方法

１）子どもの性成熟の構造概念の明確化

思春期における性成熟の概念を明らかにすることを目的として概念分析を行った．

概念分析は，実証主義に基づく Walker & Avant の概念分析を参考とした．まず，国語辞典，心理学辞典，社会学辞典などの辞書，思春期や性，発達心理に関連する図書や教科書に引用されている定義が記されている文献 7 件を用いて特徴を整理した．次に学術情報データベースである CiNii，医学中央雑誌 Web 版，Pub Med を用いて「性成熟」「性的成熟」「Sexual Maturity(Maturation)」「Sexual Ripeness」をキーワードとし 2006 年から 2016 年を対象に文献を抽出した．検索結果より，思春期における性的成熟を定義づけている文献，性的成熟に言及しておりヒトを対象とした記述がなされている文献 11 件を分析対象とした．

分析は，第１に対象文献から思春期における性的成熟に言及する部分を抽出し，性的成熟を定義づける属性を整理した．次に，整理された性的成熟の定義属性を例示する概念の用法例としてモデル例，補足例を明らかにした．その後，分析シートに先行要件，帰結を明らかにした．そして，最後に「思春期における性成熟」について操作的定義を作成した．

２）子どもの思春期における性成熟に対して親がとらえる困難さ

子どもの思春期における性成熟に対して親がとらえる困難さを明らかにすることを目的としてインタビュー調査を行った．

研究参加者は小学生の子どもを持つ親とした．対象は，先行研究の検討より母親のみならず父自身にも母親同様な困難さがるという示唆が得られたため父親も含めた親とした．なお，研究協力者の選定においては，思春期の性成熟に対する困難さは，思春期のとされる時期以前より持ちうる可能性があるため，子どもの学年，性別，子どもの数は問わないとした．

インタビューの実施にあたっては，「性成熟」とは１）の研究より作成した操作的定義を基に，①子どもの性成熟で日頃感じていること，②子どもの性成熟についてのかかわり，③子どもの性成熟でのかかわりで大変さや，難しさ，悩んでいること，④配偶者（パートナー）と子どもの性成熟やかかわりで話していることについてインタビューを行った．

分析は，データより逐語録を作成し，子どもの性成熟に対する困難さに関する記述（研究参加者の語り）を抽出し，質的帰納的に分析を行った．抽出した記述の意味内容からコーディングを行い，コード化された意味内容の同質性・異質性から分類・統合を行い，それぞれのまとまりの意味内容を抽象化し，サブカテゴリ―を抽出し，同様の手順を踏まえカテゴリーを抽出した．

４．研究成果

１）思春期における性的成熟の構造概念

思春期における性成熟の構造概念は，属性として≪生物学的な成熟≫≪生殖可能な状態≫≪性に関する心理的な成熟≫，先行要件として≪性ホルモン分泌機能の開始≫≪自然的発生に伴う身体の成長≫≪性意識の認知≫，帰結として≪成人としての肉体的成長の完了≫≪二次性徴の完了≫≪妊孕能力の確立≫が，それぞれ抽出された．以下，先行要件，属性，帰結を≪　≫，要素を〔　〕で標記する．

属性において，≪生物学的な成熟≫には，〔生殖機能を備えた身体的な成熟〕〔二次性徴の発来〕〔規則的な月経周期の獲得〕〔身体の形態的な成熟した状態〕という要素が含まれていた．≪生殖可能な状態≫には，〔性交と生殖が可能な生殖系の発育〕〔生殖機能発揮の完成〕〔妊孕性の保持〕という要素が含まれていた．さらに≪性に関する心理的な成熟≫には，〔生殖機能発揮への心の変化〕〔性に関する自己意識の成熟〕〔身体感覚の自己意識の成熟〕という要素が含まれた．

先行要件において，≪性ホルモン分泌機能の開始≫には〔ネガティブフィードバックの開始〕〔性ホルモン分泌の変化〕という要素が含まれ，≪自然的発生に伴う身体の成長≫には〔年齢〕〔身体の発育〕〔内分泌腺の発達〕，さらに≪性意識の認知≫には〔異性への興味〕という要素が含まれた．

帰結において，≪成人としての肉体的成長の完了≫には〔成人的肉体の獲得〕〔成人的肉体への成長〕が，≪二次性徴の完了≫には〔二次性徴の完成〕〔生殖能力の成熟〕，さらに≪妊孕能力の確立≫には〔排卵周期の確立〕〔性機能の成熟〕〔生殖機能の発揮〕という要素が含まれた．

抽出された構造概念より，思春期における性成熟の操作的定義は「内分泌腺の発育に起因した二次性徴の発現や性的関心から開始され『生物学的な成熟』『生殖可能な状態』『性に関する心理的な成熟』の側面を持ち，性機能を備えた身体的および性的行動がとれるようになることであり，その過程である」とされた．

２）子どもの思春期における性成熟に対して親がとらえる困難さ

研究参加者は，父親 6 名，母親 6 名の 12 名であった．親の平均年齢は 41.1(±5.09)歳であった．12 名全員既婚者であった．子どもについては，子どもの性が全て同じである親 5 名（女子のみ 1 名，男子のみ 4 名）であり，異性である親 7 名であった．子どもの数は，平均 3 人であり，最高は 4 人であった．また，第 1 子の最高年齢は 17 歳，末子の最低年齢は 5 ヵ月であった．インタビューの平均時間は 40.3（±13.46）分であった．

分析の結果より，18 のサブカテゴリ―からなる 8 つのカテゴリーが抽出された．その内，子どもの思春期における性成熟に対する親の困難さを示すものを以下に記載する．以下カテゴリーを≪　≫，サブカテゴリ―を＜　＞で標記する．

子どもの思春期における性成熟に対する親の困難さは，6 つのサブカテゴリ―からなる≪子どもへのかかわりついての難しさ≫と 2 つのサブカテゴリ―から≪親自身に起因する難しさ≫として抽出された．

≪子どもへのかかわりの難しさ≫には，＜子どもを尊重し個としてみる難しさ＞＜性について話をするタイミングの難しさ＞＜子どもの理解につながる伝え方の難しさ＞＜知識が伴わないままに拡大する性行動へ対応する戸惑い＞＜異性の性をイメージできない事での対応の難しさ＞＜身体の性的成熟にともなう親子の距離の取り方への難しさ＞から成り立っていた．また，≪親自身に起因する難しさ≫には，＜配偶者や知人といった他者と性について話をする難しさ＞＜子どもの性的成熟の把握の難しさ＞から成り立っていた．これらの困難さの前提には，＜子

どもの性的成熟の認識＞＜子どもの言動から認識する親子間の距離間の拡大＞といった≪子どもの成長の認識≫や，＜性教育の必要性を認知＞＜子どもの性的成熟に対する対応への準備＞といった≪性に対する対応の考え≫や≪性的な会話への恥ずかしさ≫があり，困難さの帰結として≪親自身の対応の変化≫や≪他者への期待≫，≪何もできず困難の停滞≫が抽出された.

＜引用文献＞

①法務省法務総合研究所編．犯罪白書（平成 25 年版）－女子の犯罪・非行――グローバル化と刑事政策－，日経印刷，2013，168-170.
②齋藤益子, 木村好秀, 関島英子, 宍戸章子. 中学生を持つ親の性意識, 思春期学, 22(2), 2004, 268-274.
③河内浩美，渡邊典子，小柳恭子，久保田美雪．思春期の子どもをもつ両親とその子どもの会話に関する調査，新潟青陵大学紀要，8 巻，2008，139-148.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 河内浩美、安達久美子、和田由紀子
２．発表標題 思春期における「性成熟」の概念分析
３．学会等名 第37回　日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	安達　久美子 (Adachi Kumiko) (30336846)	首都大学東京・人間健康科学研究科・教授 (22604)	